

岬之町だより

第7回 「ある郷土史家の貢献」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

全国の日銀の支店には、寄贈を受けたり購入したりしたその土地ならではの図書が置かれている。岬之町の日銀下関支店にもかなりの蔵書がある。歴史の町下関だけあって、市史や地元企業の社史、地元作家や郷土史家による評論や随筆など、下関の歴史にまつわるものが多い。私は時間があるときは、それらの蔵書から手ごろな本を一冊取り出して読むのを常としている。

「文学の中の下関」という本も、その蔵書の中からみつけたものだ。発行は昭和四十四年。下関が登場する文学作品が網羅的に紹介された本である。交通の要衝であった下関が、いかに多くの文学作品に取り上げられてきたかよく分かる。

筆者は中原雅夫氏。下関市役所に長く勤務して下関市史の編纂に携わり、広報係長や社会教育課長、下関図書館館長などを務め、平成元年に六十八歳で亡くなった。郷土史家としても名高く、幕末に志士を支援した豪商、白石正一郎を世に知らしめた功労者でもある。中原氏は白石家文書の出版などを手掛け、地元でしか知られていなかった彼の業績を、作家大佛次郎に紹介した。それが契機となって白石正一郎がテレビドラマに描かれるようになったという。

現在、竹崎町の中国電力下関営業所の敷地に建っている「白石正一郎宅跡」の石碑は、元々は昭和三十七年に中原氏ら有志が同営業所の裏門近くに小さな石標

を建てさせて貰ったのが始まりである。その後、テレビで白石正一郎が有名になると、中国電力が現在の立派な石碑を用意し、昭和四十二年に玄関正面に移してくれた。さらに昭和四十七年には、中原氏が碑文を書いた「高杉晋作奇兵隊結成の地」の碑が建てられた。毎年、白石正一郎の命日である八月三十一日の前後に、これらの石碑の前で、彼の遺徳をしる「資風祭」が開催されている。

中原氏が関与した石碑は他にもある。関門橋のつけ根、壇ノ浦パーキングエリアの展望台に置かれた「関門自動車道の碑」もそのひとつだ。

この碑は、表側には関門橋の工事完了を記念し、関係者を顕彰する内容が彫られているが、裏側に回ってみると中原氏の手になる関門海峡の歴史を綴った詩が彫られている。今では植込みが邪魔で裏側の碑文を読むのも一苦労だが、建てられた当初は周囲も整然としていたらしい。中原氏自身が、関門橋を背景にこの石碑をペン画で描いた絵も残っている。美しい背景に石碑が映えて見えるので、むしろ詩が彫られた側が正面のように思える。

中原氏は当時、推敲を重ねてこの詩を書いたが、石材屋に乞われて作成上の案文を渡したところ、一番最初に書いた案が彫られてしまったのだという。とはいえ、中原氏は特にうらみがましいことは書いていない。どの案にするかを石材

屋が選んだというのも当時の実態が分かって微笑ましく、石碑に彫られた文字は味があつて、なかなか良い石碑だと思う。

さて、この中原氏の「文学の中の下関」の中に、評論家の江藤淳と中原氏との「論争」が描かれており、とても興味深い。この話は、昭和三十七年に朝日ジャーナルの取材で下関を訪れた江藤淳が福田泰三下関市長と対談する際に、中原氏が陪席したことからはじまる。江藤淳といえは、当時まさに売り出し中の新進気鋭の文芸評論家であり、週刊誌に日本各地の訪問記を連載していた。中原氏は、市職員として江藤淳に親切に応接し、様々な資料を提供した。同時に中原氏は、文学愛好者としてこの中央論壇のホープに好意的な眼を向けていた。しかし、江藤淳が週刊誌に掲載した下関の訪問記は、中原氏の期待を裏切るものであった。

江藤淳は、下関と門司の印象を、「時流に置去られたこの両港」とか、『落日』の光景にふさわしい場所」と書いた。あまつさえ、市長との対談の様子を、市長が鼻をかむ様子を擬音語まで入れて下品に描写するなど、今読んでも明らかに礼を失している文章を書いたのである。

中原氏は、この記事に対する遺憾の意を、下関で発行されていた同人雑誌「午後」に掲載した。中原氏は、単に下関をけなしたのがけしからん、という書き方ではなく、江藤淳が文芸時評で掲げる物

書きとしての理念、哲学を肯定した上で、今回の訪問記がそれに反していたことを指摘し、江藤淳に批評家としての自覚を促す文章を書いたのだ。

江藤淳は、この直後にプリンストン大学に留学してしまつたから、中原氏が地方の同人誌に掲載した批判を目にとめることはなかったかも知れない。しかし、この中原氏の文章を読んで反応した作家がいた。それは、「日本沈没」で名高いSF作家の小松左京であった。小松左京は、昭和四十年に刊行された「地図の思想」というSF仕立ての旅行記で下関を取り上げているが、そこでこの江藤淳と中原氏とのやり取りを次のように紹介している。

：下関のおそらく知識人文学愛好者
の手によつて発行されている『午後』
という同人雑誌：の中で、中原雅夫
という人が、「下関を訪れた人々」
というのを連載し、下関に講演やル
ポ取材に来た、中央の有名文化人の
スケッチをこころみている。：中
でもある新進気鋭の若手評論家が、某
週刊誌のルポ取材にやつてきた時の
ことは特におもしろかった。中原氏
の眼は、この新進評論家に対して終
始謙虚で好意的に接しているし、そ
の鋭敏なセンスに対しては、忌憚な
く敬意を表しているのだが——にも
かわらず、この若い評論家が、し

ごく無責任な態度で、下関印象記を
まとめているのを見て、勃然と怒る
のである。その怒りは決して単なる
郷土に対する盲目的な愛によつてさ
さえられているものではない。この
若手評論家が、その著作にあらわし
た、りっぱな言葉をつかまえて、そ
れとまったく裏腹な、軽薄で不誠実
な取材態度を、するどく難詰してい
るのだ。——その論点は正確であり、
批判はまつとうで、しかも決して礼
を失していない。もしこのあざやか
な批判が中央ジャーナリズムにその
時掲載されていたら、大むこうは、
まさしく「一本！」とさげんでいた
ところだろうが……いかんせん、時
期は大きくうしなわれ、のつている
のもささやかな地方同人誌であり、
この意味でその評論家の下関論と、
それに対する批判は、現実の中で
まったくバランスをうしめない、批判
がいささか遠吠えじみて見えてしま
うのは、やむを得ない。

このように、小松左京という立会人を得
て、中原氏の江藤淳批判はひとつの「論
争」となったといえよう。

本州の西の端、下関は、やはり特別な
町である。この町を訪れる人々は、その
風物に物見高い関心を抱いてやつてく
る。慌ただしい訪問の中で、中央の論理
にフィットした下関像を探して文章にす

るのだ。下関という町は、よそ者から「見
られる」ことを運命づけられている。こ
れに相接する側は、もちろん健全な郷土
愛に基づいて地元の良さをアピールする
のだが、それが「見る」側の気に入ると
は限らない。中原氏と江藤淳の「論争」は、
もう五十年も昔の事件ではあるが、この
町の良さをどう伝えていくか、そのため
に我々がどのような準備をしておけばよ
いかを考えさせるものだと思う。

今回紹介した中原氏の著作は、いずれ
も下関中央図書館に所蔵されている。レ
ファレンス係の女性は、かつて館長で
あった中原氏の仕事をお手伝いしたこと
があるとのことで、親身になって図書を
探して下さつた。中原氏が晩年に執筆さ
れた「叢書」は、ワープロ印刷をコピー
し、リボンで止めた小冊子が十六集も
あって、昭和四〇年頃からの詩や短歌、
俳句、隨筆に加え、中原氏自身のペン画
の表紙などを見ることが出来る。中世か
ら幕末までの歴史が溢れる下関ではある
けれど、中原氏のような比較的新しい先
人たちの歴史を語り継いでいくことも、
また大切だと思ふ。

さて、この岬之町だよりは今回で最終
回とさせていたたくこととなった。さす
がに岬之町周辺だけではネタに詰まり、
後半は随分範囲を広げてしまつたが、岬
之町の日銀下関支店から普通に歩いて行
ける範囲内で話題を見つけないというコン

セプトは何か死守できたと思ふ。

「会議所だより」のなかに更に「岬之
町だより」があるというのは格好が悪い
とも思ったのだが、無理を言つてこの連
載タイトルを付けさせてもらった。この
タイトルにこだわつたのは、南木佳士の
「阿弥陀堂だより」という小説の題名と、
何となく語感が似ていたからだ。

この小説は寺尾聡主演で映画されてい
るから、ご存知の方も多いのではないか
と思ふ。長野県の山奥の村で、阿弥陀堂
を守りながら生きる仙人のような老女の
言葉を、町役場の若い女性職員が聞き書
きして毎月の広報紙に載せる、その連載
のタイトルが「阿弥陀堂だより」であ
る。物語も良いが、劇中に登場する「阿
弥陀堂だより」の連載の文章が、日々の
生活に密着しながら哲学的なテーマ
を語る、素晴らしい文章であつた。ああ
いう生活に密着した含蓄のある文章が書
ければ、という思いから付けたタイトル
であつたが、含蓄というより蘊蓄を傾け
るに終わっている感じで、お恥ずかしい
限りである。

半年間、蘊蓄話にお付き合いいただいた
ことを感謝したい。もしまた機会があ
れば、より含蓄のある文章を書けるよう
に努力したいと思ふ。